

# 壮年会だより

平成30年9月 秋号 中原寺仏教壮年会だより Vol. 25



## 「コーラスライン」を鑑賞 9月5日(水)19時開演

ディズニー・シーの中に、本場さながらのミュージカルを観せる劇場があり、訪れたときには必ず観に行っていました。そのプログラムの中に「コーラスライン」があり、その華やかさとダンスに、いつも魅了されていました。しかし残念なことにとどのショーも良い場面のほんのさわりだけでした。



ぜひ観てみたいと思っていた、本場ブロードウェイのミュージカル「コーラスライン」が幸運な事に日本で、しかも近場の国際フォーラムで観劇できる機会に恵まれた。

舞台は、とある新作ミュージカル「コーラスライン」のダンサーのオーディション会場、多数の応募者からわずか8つの枠をかけ、ニューヨーク中のダンサー達が成功を求めて集まって来た。

最終選考で選ばれたのは17人の男女、稽古着に身を包んだダンサー達が、それぞれの想いを胸に舞台上に立てる日をめざし、舞台の正面に引かれた一本の白いラインにズバリ並ぶ。

これからどんな選考が行われるのか、役を掴むことが出来るのか努力と挫折を繰り返す毎日の稽古の先に、夢見た成功は待っているのかと葛藤する。そんな彼らに、演出家ザックは「履歴書に載ってない事を話して欲しい、君

たち自身のことを」と話かける。過去を語る勇気が持てなかった彼らも、次第につらい思い出を赤裸々に語り始める。選考結果の場面で、番号を呼ばれたら前になさいとザックは叫ぶ、選ばれたダンサーは喜びのあまり泣き出す人もいた。しかし呼ばれた人「ご苦労さま」の一言、なんと残酷なことか。

ショーのクライマックスで、残った8名のダンサー達がゴールドのタキシードとシルクハットを手にスポットライトを浴びて踊るシーンはまさに圧巻。

素晴らしい音楽と演技そしてダンスだけで、しかも2時間一幕で、これほどのハイクオリティの作品が出来てしまう構成に、しばし感動。

(福島 秀昭 記)

## ワンポイント解説

### 「慈悲」とは?

仏教とは何かと質問すれば一般的には智慧と慈悲の教えです、という答えが返ってくる。「智慧」とは天地万物の真理、人間生死の真実を知ることだろう。その「慈悲」とは、「慈アンド悲」、の合成語だと説明される。慈とはマイトリー、悲とはカルナー。中国人は造語の天才だから、その二つを合わせて慈悲という見事な言葉を作った。

この慈悲という表現が、わが国では俗に情けをかけること、というように変容した。「お代官様、お慈悲でござえますだ」などと時代劇で農民が土下座して懇願したりする。

週刊新潮 2017年11月30日号「生き抜くヒント」五木 寛之 より抜粋

## 平成30年10月～平成31年1月 壮年会行事

### 10月の行事

20日(土) 13時半 第30回 文化講演会  
講師：佐々木 閑氏 (花園大学教授)

### 11月の行事

3日(土) 10時 お仏具磨き・清掃奉仕  
13時半 婦人会・壮年会 合同法座  
20日(火) 17時 報恩講速夜法要  
※当日お手伝い頂ける方は15時までにお集りください。  
21日(水) 11時 報恩講日中法要  
講師：義本 弘導師 (大阪府 浄行寺)

### 12月の行事

8日(土) 15時 壮年会法座  
壮年会・婦人会 合同懇親会  
28日(金) 10時 山門・石段清掃奉仕  
※当日お手伝い頂ける方は10時までにお集りください。

### H31年1月の行事

1日(火) 8時 元旦修正会・ご流盃の儀  
※どなた様にも京風お雑煮をご用意しております。

## 編集後記(壮年会だより：平成30年9月「秋号」会報)

私事にわたりますが、河合は8月11日より9月11日まで入院を余儀なくされました。健康には十分気を付け、また自信もあったのですが、想定外の落とし穴にはまった感があります。皆さまもくれぐれも御身大切に。

9月上旬、日本列島は二つの大きな自然災害に見舞われました。ご存知のように、一つは台風21号で、二つ目は北海道胆振東部地震です。この台風では、関西空港が高潮により甚大な被害を受けました。次の地震では、驚いたことに北海道のほぼ全域が停電(ブラックアウト)になりました。いずれも英知を集めて造り上げた設備が、またもや“想定外”の自然の力の前に屈したのです。

このような人間の知恵の限界を目の当たりにしますと、親鸞聖人のお言葉「煩惱具足の凡夫 火宅無常の世界はよろずのこと みなもてそらごと たわごと まことあることなきに ただ念仏のみぞまことにておはします」(歎異抄後序)をひもときたくなりました。

## 【住・職・閑・話】



今年の旧盆(8月)は、久しぶりに新潟にある友人のお寺のお手伝いをさせていただきました。新潟ではお盆の入りの日である13日の夕方ころから夜にかけて、お墓参りをするのが慣例です。

関東圏ではあまり見られませんが、お墓に蠟燭を点して僧侶とともに読経をします。以前にお手伝いをしていた10年程前は、太陽が完全に沈むころには夕闇のなかに数多くの蠟燭の陽が灯って幻想的な風景を醸し出し、子どもたちは提灯片手にお寺に来て、ワイワイ言いながら境内にある梵鐘をつく姿に、どこかノスタルジックな思いをしたものでした。

しかし今年お手伝いに行くと、日中にお参りするかたが圧倒的に多くなっていました。

夜は家族でゆっくり過ごす家庭が多くなったのでは、と推測されていましたが、ほんの10年程の間に昔ながらの風景が変わりつつあることに時代の流れを感じました。

とはいえ、やはりお盆というものは日本人にとって特別な行事といえるでしょう。

高浜虚子が残した俳句に  
「盂蘭盆会 とおきゆかりと 伏し拝む」  
というものがあります。

核家族化が進み、家族間の関係が希薄になったといわれる現代社会においても、お盆という行事には自らのいのちの繋がりを感じ、先立たれた家族を思うなかに自然と手を合やすことができるのではないのでしょうか。

亡き人をとおして、自らのいのちを支えてくれている「はたらき」に気づいていくことこそがお盆の意義です。

東本願寺の掲示板に「亡き人を案じる私が、亡き人から案じられている」と書かれていたことがあります。

お寺に来られるきっかけとなるのは、ご家族などの往生によることが多いかと思えます。

遺された私たちが故人を偲んで尊いご縁にあうことが仏と成られた亡き人からの願いです。

仏法をとおして大いなる願い、はたらきを一緒にお聞かせいただきますよう。

「真実の言葉を集めて往生の助けにしよう。なぜなら、前に生まれるものは後のものを導き、後に生まれるものは前のものあとを尋ね、果てしなくつらくなって途切れることのないようにしたいからである。

それは、数限りない迷いの人々へのこらすくわれるためである」(『安楽集』・道禪禪師)

## 中原寺グラウンドゴルフ大会開催

平成30年6月19(火)に中原寺近くの立身台公園で中原寺グラウンドゴルフ大会を開催しました。

参加者は壮年会・婦人会のメンバーと、当日コース設定のお手伝いをして頂いた壮年会山田敏彦さんのグラウンドゴルフ仲間と総勢10名でプレー、和やかな雰囲気の中で楽しい交流の時間を過ごしました。

今回は年号が変わっていると思いますが、10月か11月に、天真寺の皆さんと交流大会を予定しておりますので、奮って参加頂ければと思います。合掌

(壮年会長 石井 保 記)

